

## ② 私たちの文庫「子どものへや」

山田成子

一——いつのまにか

一〇年がすぎて

毎水曜日の午後、「子どものへや」はかけこんでくる子どもたちの声ではじまる。「きょうはなにをつくるの」「はやくつくろうよ」とにぎやかである。

ここはその名の示す通り、子どもたちの自由な部屋、本のある部屋であるが「きょうはなにを読むの」という問いはめったにない。子どもは本を借りることより、そのあとの手づくりあそびの方を期待してやってくるらしい。

昭和五十年夏、七夕の日近く、私たちの「子どものへや文庫」は誕生した。当時、距離的に近くに住んでいた「ひまわり文庫」（後述）の仲間数人が集まり、この場所（港北区日吉本町の日吉第七コーポ、集合住宅の二階端の一戸で階下は通路という好条件）ではじめたものである。この場所を開放してくれたのは、私たちの代表ともいえるべき人であるが、彼

女の場所の提供がなければ、今日の「子どものへや文庫」は存在しなかったにちがいない。この第一回目の文庫の日は、昔ながらの七夕飾りをつくることで幕をあけた。参加者約四、五〇人。以来、回を重ねて今週は第四二八回。気がついてみたら、一〇年以上が過ぎていたというわけである。

水曜日、原則として午後二時から四時まで、本の貸し出し（一人二冊）、読みきかせ、それからみんなで手づくりを楽しむ。いつでも、だれでも出入りは自由で、制約は一切なしに等しいが、手づくりの材料費として毎回二〇円を出してもらう。この部屋は無料で使用できることもあって、運営はこの材料費のほかに、市図書館の運搬費、数回のバザーの収益、この部屋の他の会合の部屋代などで賄ってきている。

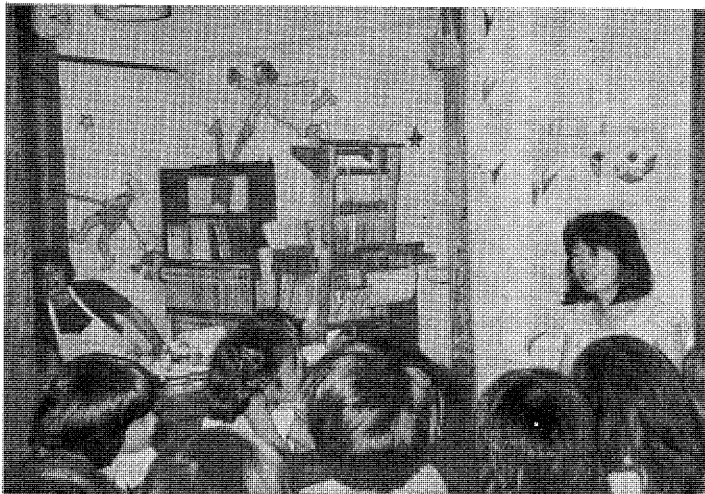
開始当時からみると、子どもの数は明らかに減ってきている。年ごとの正確な数字を示すことはできないが、はじめの頃は、多いときには四、五〇人が入れか

わり立ちかわりで大忙しであった。高学年の子もきていたが、数年のうちに全くといってよい程、姿を見せなくなった。これは今日の文庫の一般的傾向でもあるらしい。

現在は、幼児から小学校低学年の子が多く、中学生は少数派といえる。

ふだんの日には、二〇人から三〇人の間を行きつ戻りつしている。その中でたった一人「長くつ下のピッピ」のような六年生の女の子が孤軍奮闘、私たちはどれほど彼女の力を借りたことであろう。子どもの数の増減に一喜一憂したこともあった。多ければうれしい悲鳴をあげ、また少なければ、あれこれ原因や対策を考えて、頭を悩ますことも多かった。

写真一 話し会



- 一——いつのまにか一〇年がすぎて
- 二——「ひまわり文庫」徳村彰氏との出会い  
そして「子どものへや」の誕生
- 三——子どもたちは何より「つくる」のが好き
- 四——気の合った仲間たち、そして子どもたち

手づくりあそびが、簡単すぎるものであっても、逆にむつかしすぎててもよい。年齢の別なく全ての子どもが、しかも女



また春、秋の花の時期には、「日吉さんぽ」と称してぐるりとあたりをひとまわりする。春はよもぎを摘み、草もちをつくる。道ばたのたくさんの草花に目をとめる。子どもの中にはおどろくほど花の名、鳥の声のわか

る子がいて、さんぽを終えてから草花の本、鳥の本をいっしょに開く。そういう時間は実に楽しい。しかし、手づくりの魅力はもっと大きく、明らかにそれが無い日には来ない子もいるが、それもまたよし、と思っている。手づくりの楽しみは、この文庫の当初からのやり方であり、これこそ次に述べる「ひまわり文庫」（徳村氏）の旗じるしでもあったからである。

子どもの無限の可能性を深く信じ、徹頭徹尾、子どもの中に身をおき、あそびの中でこそ子どもの創造の力があふれることを、子どもたち自身に学んだ徳村氏は文庫をひらきながらも「本はなくとも子は育つ」と言いきっている。あそびを通して、文字通り「こどもが

の子だけでなく少数派の男の子も、みんないっせいに楽しめるものは何か、とない知恵をしぼり合う。いろいろな試みの揚句、このごろは「子どもの数にこだわるとはよそう」とばかり多少ひらき直った気持ちで、自分自身をも子どもの数に加えて、ひたすらあそびの中に没頭している。

残りながら、利用状況も前ほどはよくはないが、必ず読みかきかせることや、月の最後の週は本の日にすることで、なるべく本に触れる機会が多いようにとの心くばりはしている。はじめは読み手も聞き手もぎこちなかったが、子どもは次第に聞き上手になってくる。

ある日のことである。少し長い物語を読みはじめ、長いため途中でやめるつもりであったのが、即興の歌まで加わって最後まで熱心に聞いてくれたときなどは、読み手の方が感激したものである。

こうしたわけで、はじめのうちは、「こどものへや文庫」も「ひまわり文庫」の行事に沿って活動していた。春秋の「こども市」、夏のキャンプ、バザーなどかなりの時間を費やした。「姉さましおり」「折り染め」にはじまる手づくりあそびの世界は大きい。何カ月も前から、「こども市」のための品々をつくりだしていく中で、子どもと心を通わせ、日を重ねるうちに「こどものへや」は仲間をふやし、いつのまにか一人歩きをはじめていたのである。

## 二 「ひまわり文庫」 徳村彰氏

### との出会い、そして「こども市」の誕生

そして現在、「ひまわり文庫」の精神は徳村さんとともに、紆余曲折のあと、日吉を遠く離れた北海道の地（網走支庁管内滝上町）に「子どもの村」づくり運動としてその根を据えている。

日吉の地区で書店を経営していた徳村彰氏が、「子どもによい本を」との願いをこめて「ひまわり文庫」を開いたのは、もう一五年も昔のことである。以来、多くの子ども、若者たちと数知れぬほどのすばらしい輪を広げてきた。文庫にかかわりのある人は、多分その名を御存知のことと思う。

「こども市」の誕生  
「こども市」の誕生は、日吉の地区で書店を経営していた徳村彰氏が、「子どもによい本を」との願いをこめて「ひまわり文庫」を開いたのは、もう一五年も昔のことである。以来、多くの子ども、若者たちと数知れぬほどのすばらしい輪を広げてきた。文庫にかかわりのある人は、多分その名を御存知のことと思う。

写真一 3 小さなサンタクロース (クリスマス会)



写真一 4 港北図書館職員による大型紙しばい (クリスマス会)



写真一 5 読みきかせ



三——子どもたちは何より「つくる」のが好き

この長い年月の間につくられた手づくりの品々は、九冊にもおよぶ「文庫日誌」の古びたノートの中に、ぎっしりとつまこまれている。

どの子どもにも例外なく好かれたのは「折り染め」である。これは障子紙を折ったため、皮用の染料にひたして、さま

ざまな模様と色合いの微妙な美しさをとくりだすもので、染めあげた紙は千代紙として使う。小さい子より大人の方が上手にできる、とは限らぬところにもその面白さの秘密があるように思う。「六角箱」「びゅんびゅんごま」「ぱたぱたびようぶ」など多くのものに貼って楽しんで。この「江戸からくり」とよばれる「ぱたぱたびようぶ」などは、でき上がるまでの手順が複雑で、小さい子には無

理なのであるが、それでも手助けを借りながら何とかつくり上げてしまう。指先を糊で汚すことを嫌っていた子も、きれいに仕上げるにはそれが必要、ということとを自分で知る。季節ごとの折り紙やひな祭の「変わりびな」も、何度となくうかえているうちに、目に見えて上手になる。それがまた次への意欲となる。つい先月、お正月のための「大型かるた」をつくった。台紙の裏はもちろん折

り染めである。また、字の書けない子は絵だけを描いて、読み札は大人の聞き書き、その上へかVとへいVの札が二組も三組もあり、といった傑作ぞろいの唯一無比の「いろはがるた」を、お見せできず残念に思う。

Kという高校二年の男の子が、ときにくらりと姿をみせては、子どもたちを沸かせるのであるが、この時もあるたの一组も作ってくれた。K君は小学二年生の

頃から文庫の常連で、それもかなりのいたずら坊主であったが、その彼がまだに年に何度か足を運んでくれることを、私たちがとてもうれしく大切なもの思っている。

つくることの上に、それを使ってあそぶとき、子どもたちはいっそう喜ぶ。こまも凧(たこ)も、「割りばし鉄砲」から「竹とんぼ」にいたるまで夢中である。鬼の面に、新聞紙をかたく細く丸めて刀とさやをつくった時など、力あまつた子どもたちと近くの裏山まで出かけて、エイッ、ヤーと大人まで汗を流したものである。このほかにも毛糸を使って編むこと、織ること、布を染めることなど数え上げるときりがない。

季節がめぐり一年も終わりに近づくと恒例のクリスマス会である。肝心の進行係の子が直前まで名のりでくれなかつたりして、多少不安な気持ちで当日を迎えることもしばしばあるが、どの年もひとたび幕があがると、そのときどきの子どもが持ち味を生かして、さいごまで会を盛り上げてくれる。歌をうたい、本を読んでもらい、なぞなぞを出し合って、また、ときには楽器が入り、といった他

愛のないものであるが、そのにぎやかさは格別である。どういうわけかその日は子どもたちの人数が、ふだんの文庫の日の二倍、三倍にふくれ上がる。前の週にみんなでクッキーを焼いたり、当日はケーキ台に飾りつけをしていっしょに食べて、小さなプレゼントもあつてという楽しい話につられて、当日会員が大幅にふえてしまうのである。赤い上着とズボン、三角のとんがり帽子につけひげまで本格的な、愛らしいサンタの手からみんなにプレゼントが配られる。一〇年来のこの手づくりの赤い衣装で、これまで何一〇人の小さいサンタクロースが登場したことであろう。こうしてこの年も幕を閉じ、またひとめぐりの新しい日々を迎えることになる。

#### 四——気の合った仲間たち、そして子どもたち

何ごとも長続きさえすればよいか、どうかについての議論はさておき、この文庫がこれまで長い間続いてきたことの大きな理由は、心から気の合う仲間たちがいたことである。もちろんその前に、恵

まれた場所の与えられていたことが、長続きを可能にした第一の理由ではある。そのうえにこれまでの年月、さまざまな折に、多くの人の助けに支えられてきたことも忘れられない事実である。一つひとつを記すことはできないが、これもまた、文庫の財産の一つといえよう。一年足らずの短い期間であったが、「お話おばさん」として子どもたちに慕われ、風のように去っていった若い主婦のことは、まだ記憶に新しい。

しかし、この文庫で、長い間その核となり、いつもいっしょに力を合わせてきた八人の仲間がいたからこそ、ここまでやってくる事ができたのだと思っている。それぞれは平凡な主婦であり、もの見方も全て同じとは言えないが、互いに相手のたりないところを補い合って、実によく気が合い、文庫を離れたところでも数多くの楽しみをもにしている。しかしながら、私たちに悩みがないわけでは決してない。迷いも多くある。反省すべきことの多さに押しつぶされもする。それでも気をとり直し、肩ひじをはずらさず、常に自分自身を子どもの中においてきたことが、大きな力になっている

のである。そしてもうひとつ、この「へや」を楽しい場所として集まってくる、子どもたち一人ひとりの姿を忘れてはならないと思う。私たちが子どもたちに何かを与えたのではなくて、子どもたちこそ、私たちを励ましてきてくれたのではなかったか。子どもも大人も、ともに楽しんできたことが、細々とはあるがその歩みをここまで続けさせたのであり、この先もそうであろうと信じている。

思いがけない機会を与えられて、私たちの文庫の歩みを述べてきた。これ以上でもこれ以下でもない、小さな文庫の姿であるが、立ち止まって自らをふりかえる、よい機会であったと思っている。

さいごに、サン・テグジュペリのごばを記したい。

「おとなはだれも、はじめは子どもだった。しかしそれをおぼえているおとなは、いくらかもいない」

——星の王子さまより——

△こどものへや文庫▽